

2. 英語科

〈目的〉

東南アジア地域の文化を具体的に学び、知り、知識を増やすことが大前提である。ただ、知識を増やすだけではなく、それを様々な角度から向き合い、現代社会の諸問題と関係づけて解決策を示すことが最終目的である。そのためには、東南アジアの文化だけを学ぶだけではなく、日本文化との比較が必須となる。

発表活動（中間発表・最終発表）を通じて、プレゼンテーション力、情報をまとめる力、質問に即座に答える力を育成する。また、論文執筆を通じて、発表した内容をまとめる力を育成する。それらを通じて、生徒の創造性・思考力を養う。加えて、受身ではない自発的な研究を通して、生きる力を養うことも図る。

〈内容〉

本年度の SGH アジア探究（英語系）講座は、月曜日 5 時限（以下月曜班と呼ぶ）および木曜日 5 時限（以下木曜班と呼ぶ）を中心とした 2 講座の開設となった。指導担当は月曜班には佐川教諭、木曜班には佐々木英晃教諭が当たることになった。

また、本講座はその取り扱う内容と定員の都合上、例年、文系・理系を問わず募集しているが本年も、月曜班 9 名、木曜班 10 名の生徒から構成されるに至った。内訳は 月曜班は文系 7 名、理系 2 名、木曜班は文系 3 名、理系 7 名である。両班ともに、期間の多少のずれはあるものの、年間を通じて同内容で講座を進めた。

1. 活動の場所、方法（手段）および記録

本講座はプレゼンテーションの準備や練習をするために適しており、英語の授業でも使用している LL 教室を主な活動場所として開講したが、調査対象の舞台となる東南アジアに関する文献が最も充実している図書館やインターネットでの情報収集を行うために LAN 教室も適宜利用した。

また、自由探究する方法も特に制限を設けず、文献以外にもスマートフォン等を、必要に応じ使用することを許可した。

そして、1 時間の活動や得た内容を記録するために、月曜班は毎時の活動に合わせて項目にアレンジを加えたプリントを、木曜班は研究ノートを生徒に配布した。この中に 1 時間の探究内容を記録させ、当授業時または次授業時に回収した。

2. 日程

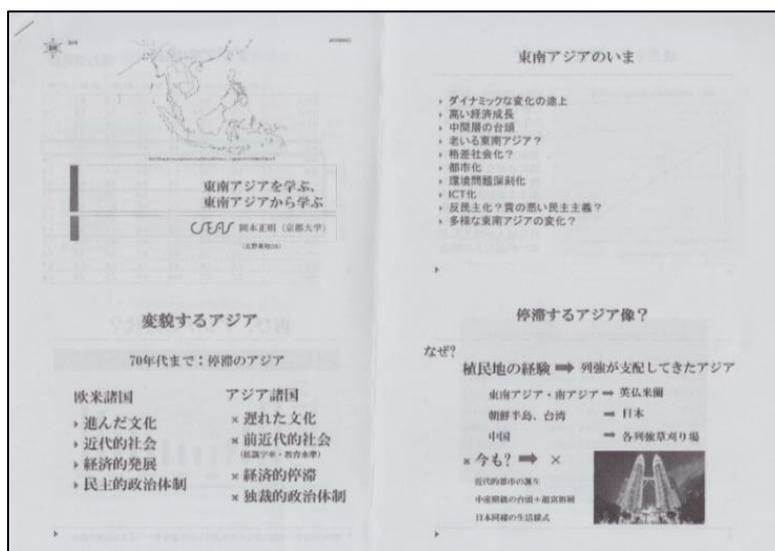
	月曜班	木曜班	活動内容
①	4月16日	4月12日	・課題研究説明会
②	4月23日	4月19日	・講義「なぜ課題研究をするのか」 ・講義「課題研究の進め方」 ・説明「SGH について」

	月曜班	木曜班	活動内容
③	4月21日	4月21日	・岡本正明氏 (京都大学東南アジア研究所教授) 講演 「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」
④	5月上旬 ～5月中旬	4月下旬 ～5月上旬	・導入～東南アジアの国に関する調べ学習 ・グループ編成
⑤	5月下旬 ～6月下旬	5月中旬 ～6月中旬	・テーマの設定 ・テーマの絞り込み・設定 ・テーマに関連する自由探究
⑥	7月上旬 ～7月中旬	6月下旬 ～7月中	・進捗状況報告会・意見交換会 ・進捗状況報告会・意見交換会を受けて検討 ・夏季休暇期間中の探究活動計画
⑦	8月下旬 ～9月上旬	8月下旬 ～9月上旬	・中間発表準備
⑧	9月中旬 ～10月下旬	9月中旬 ～10月下旬	・中間発表最終準備
⑨	10月27日	10月27日	・中間発表
⑩	11月上旬 ～1月下旬	11月上旬 ～1月下旬	・中間発表を受けての内容再検討 ・テーマに関する自由探究 ・大阪大学留学生による指導助言 ・発表内容の最終仕上げ ・発表内容の英訳 ・最終発表直前準備
—	12月15日	—	・2018年度スーパーグローバルハイスクール (SGH) 全国フォーラム (東京国際フォーラム)
⑪	2月2日	2月2日	・最終発表
⑫	2月上旬 ～2月中旬	2月上旬 ～2月中旬	・論文作成

3. 活動内容詳細 (以下「2. 日程」の番号に即して記す)

- ① 課題研究の各講座の概要について説明を、月曜班、木曜班それぞれ1時間を費やして行う。その後、生徒に講座の希望を提出させ、講座編成を行った。その結果、英語系(月曜班)が9名、英語系(木曜班)が10名の生徒から講座が構成されることとなった。
- ② 課題研究の意義、進め方についての講義およびSGHについての説明を行った。通常の課題研究とは違うSGH課題研究の特殊性も併せて知ってもらうことが狙いである。

- ③ 京都大学において岡本正明氏（本校卒業生：京都大学東南アジア地域研究研究所教授）による講演「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」をSGH 課題研究選択生徒は原則として聴講する。岡本氏は本校のSGH の取組発足以来、課題研究などの探究活動に対してご指導をいただいている。講演の内容は、東南アジアを中心としたアジアの経済成長およびそれに伴う経済格差問題、ICT化など多岐にわたるもので、最後に日本と東南アジア双方の視点から見たそれぞれに対する関りについて説明をいただいた。生徒達にとって「東南アジア」のダイナズムを感じとり、「東南アジア」探究に対する興味をさらに深くする非常に有意義な時間となった。



〈講演レジュメより〉

- ④ 実質的には当時期より生徒たちによる探究活動がスタートした。グループ分け・テーマ設定をするため、1人ずつどのようなものを研究したいのかをプレゼンテーションするよう指導した。1人3分ずつ発表してもらった。発表内容は多岐にわたり、食文化、暑さ対策、環境問題、貿易、政治などがあった。そこから、どの内容であれば1年間の研究テーマに値するかを話し合った。話し合いの結果、以下のグループ・タイトルが決定した。

月曜班 ミャンマーの教育（5人）
 企業経営（4人）
 木曜班 宗教教育（5人）
 暑さ対策（5人）

- ⑤ 比較文化的アプローチの研究開発を進めるべく、関西学院大学の陳立行教授(社会学)には、月曜班6月4日・18日、木曜班7日・21日の2回連続で英語系のテーマである「比較文化論」をテーマに「異なる社会を考察する際、なぜ比較の視点が必要になるか」に関して講義をしていただいた。その後、発表の際に考察すべきことを実践するために、以下の課題を生徒に課した。

1. 東南アジアに進出している企業の展開を調べる
2. 東南アジアに進出している企業が出会った難題を調べる
3. 東南アジアに進出している企業に必要な人材像を調べる

月曜班・木曜班ともに2～3人のグループに分かれ、以下のように自分の興味のある地域に関して、パワーポイントを作成し、発表準備を行った。

月曜班

「カンボジアに進出した日本企業の現状と展望」

「タイに進出する日本企業について」

「ミャンマーの抱える難題」

「ブルネイの現状と課題」

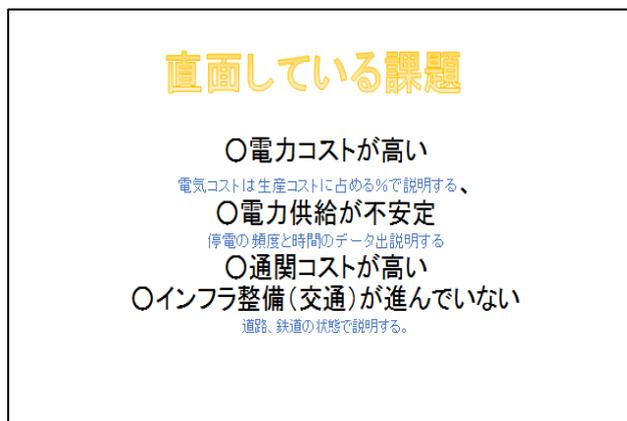
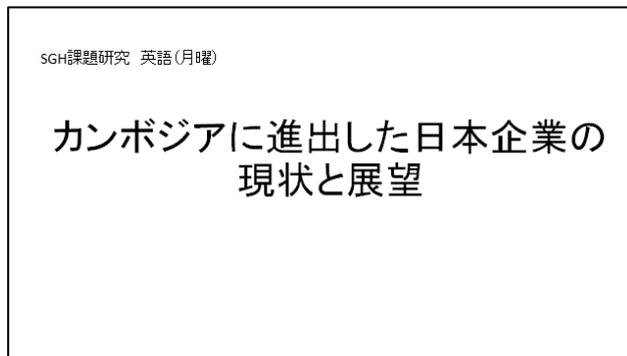
木曜班

「フィリピンにおける労働力」

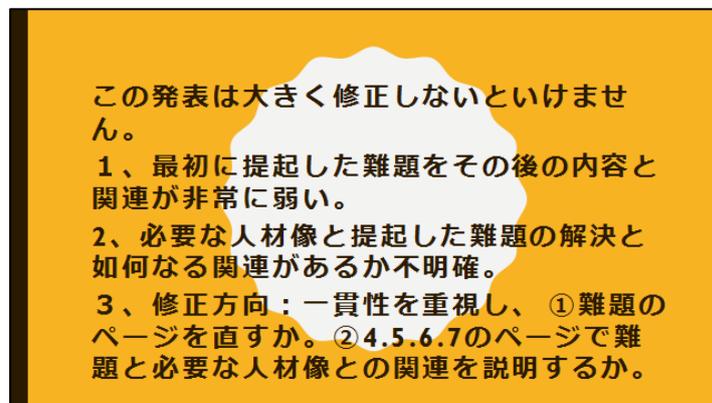
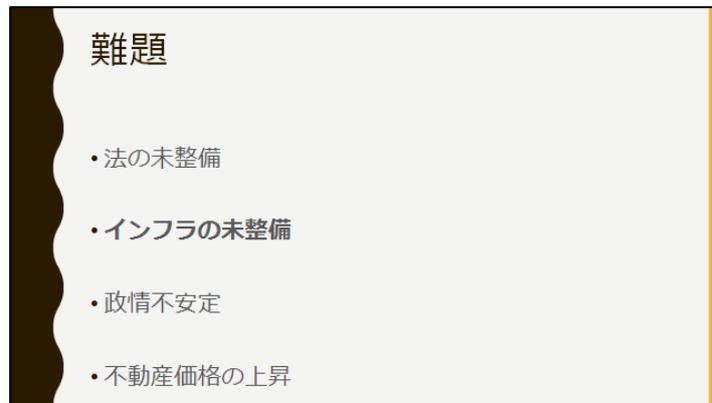
「シンガポールの民族問題」

「マレーシアと日本の関係」

月曜班は発表の授業が、大阪北部地震と重なり、変更した日が西日本豪雨の影響のため、中止となった。そのため、パワーポイントスライドをメールに添付し、添削指導をしていただくことになった。以下にスライドの例を示す。



「ミャンマーの抱える難題」



この課題に取り組むことにより、情報収集とその分析方法・論理展開の仕方を身につけることができた。

⑥～⑧

各グループで知識を深め合う時期である。たとえば、暑さ対策のグループでは、様々な暑さ対策製品を調べた。各製品の長所・短所・価格などを調べ上げ、それぞれが現地でどのように使われているか、どのような効果があるのか、を調べることで考察を深めた。そして、夏休み前の段階でもあったため、夏休みにおいて何を調べておくかの分担も行い、夏休みに各自調べることとなった。

夏休み明けは、夏休みに調べた内容をもとに情報交換をグループ内で行った。たとえば、宗教教育のグループにおいては、宗教のどの具体的なトピックに焦点を当てるのか、それは行事か、礼儀か、食事かという点である。そして、最終目的をどのように設定して、研究をすすめていくかも考察した。

また、中間発表に向けて、スライド作成、原稿作成、プレゼンテーション練習などを重ねた。

- ⑨ 本校内六稜会館で中間発表が行われた。発表は、1つのグループ（暑さ対策）を除いて英語で行われた。各チームのタイトルおよび概要は次のとおりである。

月曜班 Giving Myanmar New Education

Tourist Trade of East Timor

木曜班 Comparing Islamic Culture with Japanese Culture

東南アジアの暑さ対策について



〈中間発表の風景〉

発表後に出席いただいている指導助言の先生方から講評をいただいた。その中では、今後の展開、最終発表に向けてどのような方向づけをするのか、どのような根拠を示していくかが先生方から示された。また、英語グループの中で高評価を得た「東南アジアの暑さ対策について」が2018年度スーパーグローバルハイスクール (SGH) 全国フォーラム（平成30年12月15日（土）、東京国際フォーラム）にてポスター発表することが決定した。

- ⑩ 暑さ対策のグループは、前述のとおり全国高校生フォーラムに参加することが決定したため、ポスターの作成と練習を英語で行った。まず、ポスターはイラストなどを用いることでわかりやすくすることを第一に考え作成するよう指導した。また、原稿チェックも行い本番を迎えた。

当日は、午前中においては、交流会に参加した。教育・文化・歴史・言語・芸術のグループに参加し、多岐にわたったテーマについて交流した。参加生徒によると、英語で行ったため、とても良い刺激を受けたとのことである。

午後になると、ポスター発表本番である。2回行ったが、時間通りに終わることができ、質疑応答にも自分の言葉で答えることができた。



交流会



ポスター発表の様子

後日いただいた評価シートを用いて、最終発表に向けて改善を重ねた。評価シートの内容は以下のとおりである。

ヤードム（暑さ対策製品）の使用において、体に悪影響がないのか、長期的使用に問題がないのかなどの問題を解明する必要がある。それらを、理論と研究両方の観点から検証することが必要である。また、なぜタイでヤードムの人気があるのか、ほかの国々ではどうであるかも知りたい。プレゼンテーションと質疑応答はよくできていた。さらなる研究を期待する。

また、他の3グループにおいても、最終発表にむけてさらに考察を深めた。本校生徒を対象にアンケートを実施してデータを集めたり、大阪大学大学院の東南アジア出身の留学生に来校していただき、授業中に直接英語で聞いたりした。留学生には、最終発表前に内容を見ていただき、生徒が発表する内容に問題はないか、改善点はないかを具体的にご指導いただいた。

- ⑪ 本校視聴覚教室で最終発表が行われた。各チームの最終発表時におけるタイトルおよび概要は下記の通りである。

月曜班 Giving Myanmar New Education

「ミャンマーの教育」

We learned that the purpose of Myanmar's education is to succeed in college entrance examinations. Therefore, in order to solve this problem, we considered short-term targets and long-term targets. We suggest carrying out an achievable internship for high school students.

Tourism Industry in Timor-Leste "by Timor-Leste for Timor-Leste

「東チモールの東チモール人による東チモール人のための計画」

21世紀最初の独立国である東チモールは外国の支援によって立ち直

りつつあるものの、未だにたくさんの問題を抱えている。今、東チモールの発展に必要なのは、観光業なのだが、そのためには現地の人が自国をアピールしたいという意欲が不可欠だ。そこで私たちは、博物館の建設によって愛国心を育てる長期的な計画と外国の企業を参入させる短期的な計画を考えた。

木曜日 Share Kitchen～to share meal, to share value, to share life～

私たちはこれまで増加する東南アジアからの観光客や労働者のイスラム教徒と共存していくためにはどのようにすれば良いのかを考えてきました。食べることは生きること。ムスリムとの共存のためには、ハラールフードの充実が必須です。私たちの考えた、新しいレストランで人生に、シェアを。

Stop ourselves sleeping

～What we learned from an inhaler in Thailand, YADOM～

あなたは授業中に眠気を感じることはありませんか？私たちの調査によると、90%以上の生徒が眠気を感じているそうです。私たちはこの問題を解決するために、ヤードムというタイで人気のある製品を使うことを提案します。ヤードムとは何かから、日本に導入するビジネスプランまでを発表します。

以下のようなコメントをいただいた。

- ・プレゼンテーション力が SGH 5 年間で最も高い。成長している
- ・Problem Based Learning がしっかりと行われていて、成果が現れていた
- ・冒頭からテレビショッピングのような発表で始まり、発表に工夫がみられた
- ・イスラム教徒と日本人の文化の違いを踏まえたうえで、どちらの価値観も否定しない方法が示されてとても納得した



最終発表の様子

⑫ 論文作成

講評・コメントをしっかりと理解した上で、自分の取り組んできた研究を客観視し、論文の作成にとりかかった。

以上

〈成果〉

1 132期2年生 課題研究後に実施したアンケートについて

今年度の課題研究SGH関連講座の取り組みに付いて、その成果を検証するために英語系の講座を受講している生徒19名を対象に2度のアンケートを実施した。第1回アンケートは年度当初の課題研究の時間に実施し、第2回のアンケートは課題研究の最終発表会（平成31年2月2日実施）終了後最初の課題研究の時間を利用して実施した。以後、第1回のアンケートを事前アンケート、第2回のアンケートを事後アンケートと表記する。

アンケートの質問事項は、関西学院大学社会学部の吉田寿夫教授からの委託による「SGH生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」調査研究の質問項目に準じて設定した。その内容は以下（1）～（20）の通りであり、各質問項目について

4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまり思わない 1 まったく思わない
の4つの選択肢で回答する形式とした。なお、事後アンケートでは、下記の質問項目を「以前より、……なった」の形式に直して実施した。（例：以前より、英語でのコミュニケーションに抵抗がなくなった。）

- (1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない
- (2) 海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思う
- (3) 日本のことをもっと知る必要があると思っている
- (4) 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思う
- (5) 大学の先生や企業経営者と話をすることには抵抗がない
- (6) 東南アジアへの興味や関心を持っている
- (7) 東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやってみたい
- (8) 東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたい
- (9) 将来は、仕事で国際的に活躍したいと思う
- (10) 地球規模で社会に貢献したいと思う
- (11) 卒業後は、海外の大学・大学院等で学んでみたいと思う
- (12) 世界的な問題について関心を持っている
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い
- (14) 開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思う
- (15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う
- (16) 人前で発表することには抵抗が少ない
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う
- (18) 開発途上国の経済発展に貢献したいと思う
- (19) 日本がより望ましい国になることに貢献したいと思う
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う

① 132期生対象アンケートの年間推移の分析

以下の表は英語系講座選択の受講生からのアンケートに対する回答である。各質問項目の番号の数値化によって、項目ごとの平均値を算出した。表1は事前アンケート、表2は事後アンケートの平均値である。

表1 132期生 SGH 英語系 課題研究事前アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
3.11	3.74	3.79	3.63	2.79	3.42	3.63	3.53	3.47	2.95
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.79	3.42	2.84	3.21	4.00	2.89	2.32	3.37	3.32	2.21

表2 132期生 SGH 英語系 課題研究事後アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
3.16	3.84	3.79	3.58	3.11	3.37	3.58	3.42	3.58	3.26
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.95	3.37	3.26	3.37	3.95	3.05	2.63	3.26	3.32	3.05

以上の2つのアンケート結果の数値の差が表3である。

表3 132期生 SGH 英語系 課題研究アンケート 項目別増減値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
0.05	0.10	0	-0.05	0.32	-0.05	-0.05	-0.11	0.11	0.31
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
0.16	-0.05	0.42	0.16	-0.05	0.16	0.31	-0.11	0	0.84

また、各項目番号ごとに回答番号の割合をグラフ化したものが図1および図2である。

図1 132期生 SGH 英語系 課題研究事前アンケート 質問項目別回答分布

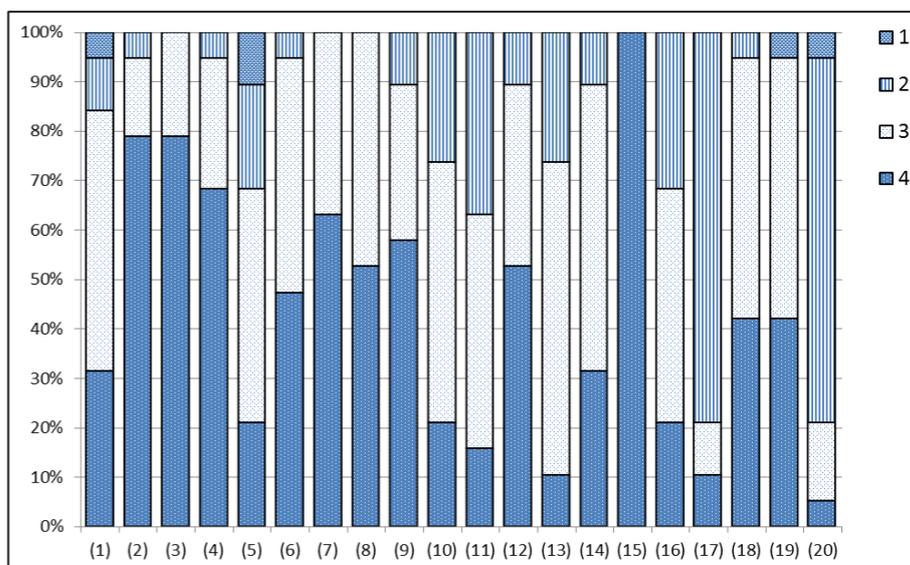
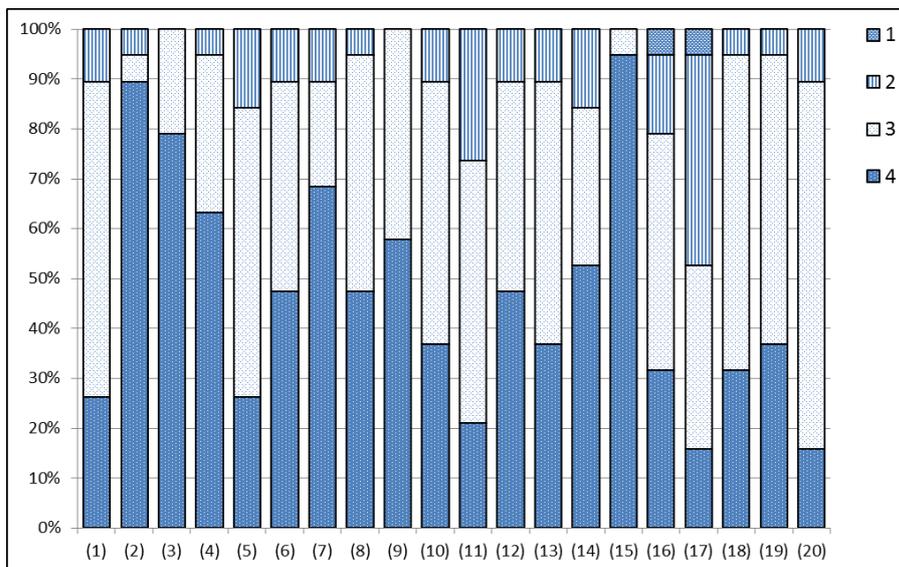


図2 132期生 SGH 英語系 課題研究事後アンケート 質問項目別回答分布



以上より、以下の項目について0.30以上の増加を確認することができた。

- (5) 大学の先生や企業経営者と話をするには抵抗がない。
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い。
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う。
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う。

(5)については、中間発表や最終発表、全国高校生フォーラムを通じて大学の先生や留学生などと話す機会が多く設けられているため、伸びたといえる。また、同様に(13)についても、発表を通じて自分の意見を表現することを望む生徒が多く見られたといえる。(17)では、英語系を選択する生徒の中には、国際的に活躍するという動機を持って選択しているといえるが、本課題研究を通してその気持ちがさらに強まったと言える。また、特に増加したことがわかったのは(20)である。自発的にテーマ設定を行い、自分たちで独創的な方法で分析・調査し、研究発表・論文執筆を経ることで、自ら課題を発見し分析する力がついたらと答える生徒が多く見られた。

以上のことより、コミュニケーション力、分析力、国際的な視点から社会問題を考える力が大いに育まれたといえる。

2 アンケートの自由記述欄に見られる生徒の変容

事前・事後アンケートの中から特徴的な事例を取り上げる。

① 事前アンケート

- ・プレゼンテーションし、質疑応答で答えられるレベルの英語力を身につけたい
- ・東南アジアの人々の生活をよくするような研究をすすめたい
- ・実際に東南アジアに行くことができないので、インターネットなどで調べる中心になると思うが、しっかり情報の取捨選択をして取り組んでいきたい
- ・話すときに焦ってしまって思ったように話せないことがあるので、気をつけたい
- ・ありきたりなつまらない発表にだけはしたくない

② 事後アンケート

- ・実際その内容がどうであれ、問題解決に向けての改善案を考えることができた。また留学生と英語でコミュニケーションをとることで、少し英語で話すことへの抵抗がなくなったがまだまだ英語力が足りないを実感することだけであった。
- ・問題点を見つけ、ただそれに対しての解決策を考えるだけでなく、そうなった原因・背景を調べ、様々な視点から考えを深める大切さがわかった。また限られたなかで情報を集める難しさや自主的に動く必要性。課題に行きづまっていた後に前に進めたと実感できたことでその楽しみを知った。
- ・他人の意見と自分の意見がぶつかることはもちろんあったけれど、それに折り合いをつけてうまくまとめて進めていく力、プレゼンテーションの力、パワーポイントを作る力、聞く相手のことを思ってプレゼンテーションをする力（これは英語で発表したからこそ身についたと思う）を身につけることができた。
- ・どのようにすれば人にきちんと伝わるのかがよく分かった。また、実際に留学生が来てくださったことで英語でのコミュニケーション力が試されたのも良かった。東南アジアにも触れることでプラス面だけでなくマイナス面も知ることができて、良い経験になったと思う。今後に学んだことを活かすことができたらいいと思った。
- ・これまでは答えのある問題を解くことが多かったが、1年間答えのない問題にじっくり向かい合ってきて、難しさに気付いた。